

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第908号 平成27年4月3日

漂流便局

住民が300人という瀬戸内海の小島「栗島」には、不思議な郵便局があります。

その名も「漂流郵便局」といい、局員は、中田局長と久保田局員のたった二人です。

この郵便局は、1964年（昭和39年）に建てられ1991年（平成3年）まで実際に使用されていた旧栗島郵便局の庁舎を使用していますが、本当の郵便局ではありません。



「漂流郵便局」のホームページを見ると、栗島にはかつてさまざまな人・物・事が流れ着いて来たが、この「漂流郵便局」は届け先の分からない手紙を受け付け、いつか宛先不明の存在に届くまで「漂流私書箱」に手紙を漂わせてお預かり致します、と書かれています。つまり、「漂流郵便局」には、物や人だけではなく、人々の思いまでもが漂着する場所のようです。

そもそも「漂流郵便局」は、現代美術家の久保田沙那さんが瀬戸内国際芸術祭に出品する作品として着想したものです。

久保田さんは、「旧栗島郵便局」の窓に映った自分の姿を見て、自分もまた漂流者としてここに流れ着いたと感じたそうです。そして、この場所を「自分と同じ感覚を体感してもらえる場所になるのではないか」と考え、「旧栗島郵便局」を「漂流郵便局」という1つの作品に仕上げ、2013年（平成25年）10月に開局したものです。



彼女は、今、「漂流郵便局」の局員としても活躍しています。

この「漂流郵便局」は、当初は瀬戸内国際芸術祭会期中の1か月間だけの開局の予定だったそうです。しかし、その後も月平均200通もの手紙が届き続けたため、久保田さんは「漂流郵便局」を継続する事にしたのでそう、当郵便局に届いている手紙の数は、今年の1月現在で3500通を超えているとの事です。

この「漂流郵便局」開局から今日に至る経緯については、今年の2月に1冊の本としてまとめられています。

この中では、「漂流郵便局」に届いた沢山の便りの一部が紹介されています。

便りの宛先は、将来の自分、既に亡くなっている人、思いを伝えられなかった初恋の人等様々です。

亡くなったお母さんへ
いまだったら言える
たくさんのありがとう

この便りを書いたのは、息子でしょうか、それとも娘なのでしょう。とても短い文章ですが、この中には、親と子の確執と愛が凝縮されているように感じます。

「このてがみは、あなたにちゃんと、とどきましたか」と題する手紙は、保母をしていた女性の、まだ見ぬ我が子に宛てたものです。

おかあさんは、ほいくえんのせんせいをしていました。
たくさんのこどもたちをそだててきましたが、あなたのおかあさんになるのははじめてです。
おとうさんとであってから、おかあさんは、あなたにあいたくて、あいたくてしかたありませんでした。(中略)
わたしを、おかあさんにしてくれてありがとう。

この手紙からは、間もなく母親となろうとする女性の喜びが、溢れる程に伝わって来ます。

息子に宛てた母親のこんな手紙もあります。

ちゃんとはん食べよる？
ゲームばかりしとらんと、ちょっとは電話してきてよ。電話はせんでもメールでもいいから。LINEの「既読」だけが生存確認の証しやなんて。はあ。育て方まちがえたんかな～

世の中には、同じ思いを抱えているお母さんは沢山いらっしゃる事でしょう。

また、19年前に、11歳で亡くなった最愛の息子に宛てた大西さんという父親の手紙には、胸衝かれる思いがします。何をしても息子の事と重なって見えてしまう、という心境は、私も12年前に当時24歳だった息子を亡くしていますので、痛い程に良く分かります。

大西さんは、11年間全力で生きた息子との日々や思いを受け止めてくれるところがあると知って、「漂流郵便局」に息子に宛てた手紙を出すようになったのだそうです。手紙を書く事で、自分の思いがより鮮明に、確かなものになって行くという事はあると思います。それは、「漂流郵便局」宛てに手紙を出す人の共通した思いか

も知れません。

ただ、多くの人が「漂流郵便局」に葉書を出すのは、届かぬはずの手紙や葉書が、決して宛先不明で戻ってこないからではないかと思います。

「漂流郵便局」では、届いた手紙やはがきには返事を出しません。それは、返事を出す事で、「手紙やはがきを書いた人」とそれを「届けたい人」との想いのキャッチボールが途絶える事を恐れるからと、郵便局長の中田さんは述べています。

自分の思いをどうしても届けたい人がいる。でも、「届けたいけど届かない」。この苦しみを、「漂流郵便局」は静かに、しかし、しっかりと受け止めてくれているようです。

因みに、「漂流郵便局」の宛先は、
郵便番号 769-1108
住 所 香川県三豊市詫間町栗島 1317-2
です。